

『京都の洪水記録』という資料によれば、平安京遷都後の延暦18年(799)～昭和10年(1935)間に河川の大洪水は合計149回も生じている。およそ8年に一度の割合である。記録に残らない小さな洪水はさらに多いであろうから、平安末の白河上皇が、比叡山の山法師、賽の目とともに加茂の水(氾濫)を「天下の三不如意(意のままにならぬもの)」の一つに挙げたことも、なるほどと思われる。

右図は鴨川水系の略図であるが、ここに描かれなかった枝川も数多く存在する。急峻な山岳地帯ではないが、谷が深く切れ込み、幾重にも重なり合う。景勝地としては勿論由緒ある神社や寺を数多く擁し、洛北から北山にかけてのこの地域は、まさに「水を中心とした霊地」の趣きが漂う。

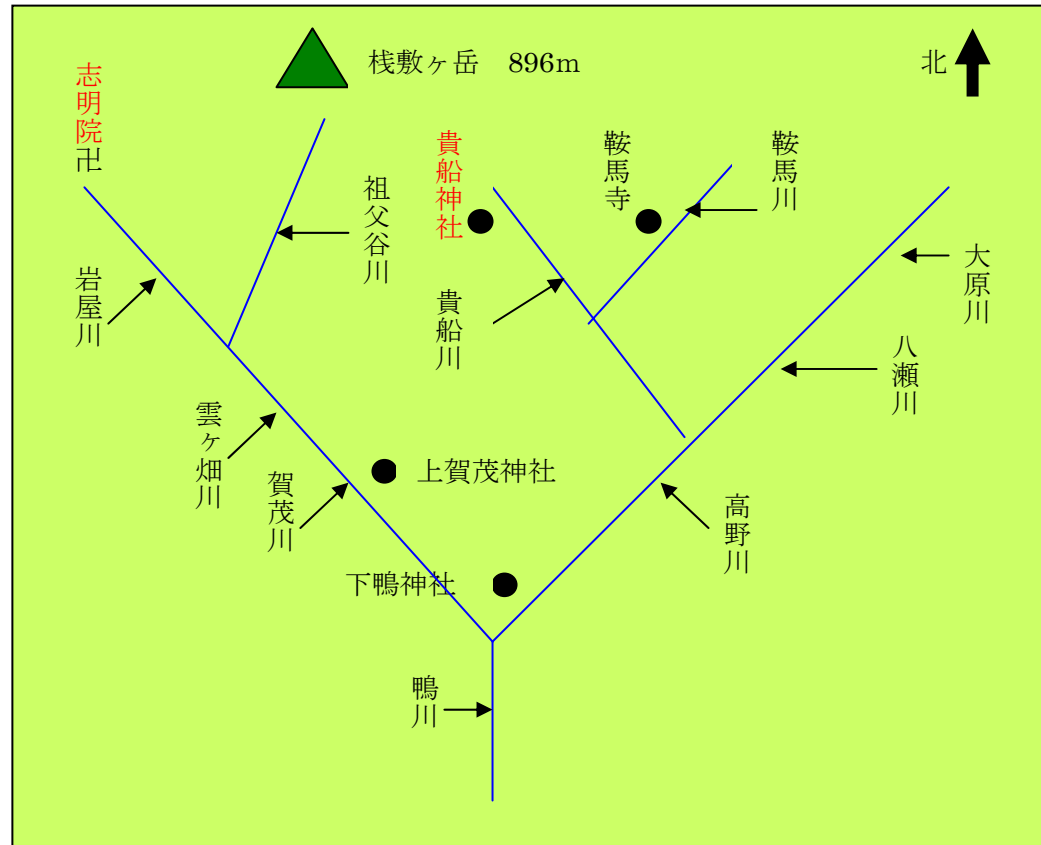
関伽(あか)と aqua(アクア)

関伽とは仏前に供える水、あるいはそれを入れる容器を指す。水には霊性があると考えられていたようである。

aqua が頭に付く英単語は全て水に関係している。例えばアクアリング、アクアフィルター、アクアリウム(水族館)、アクエリアス(水瓶座)といった具合である。

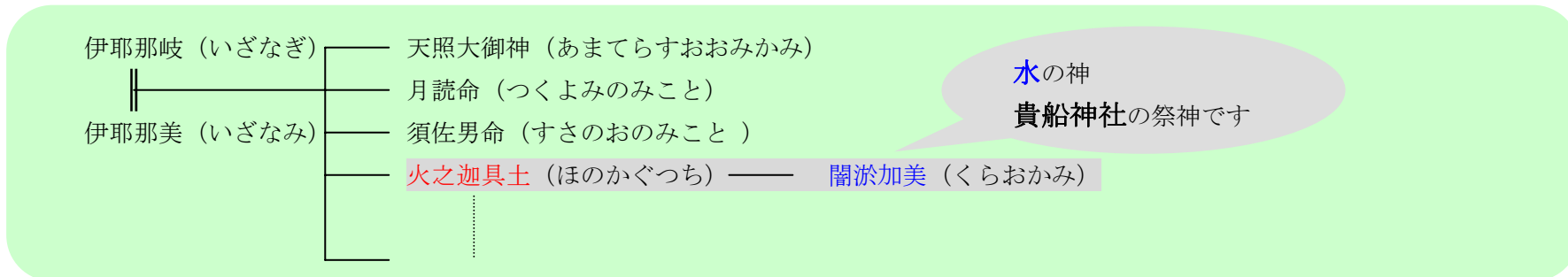
関伽とアクアは同根との説がある。関伽は梵語でアルギヤまたはアルガと云い、「功德水」と訳される。このアルギヤ、アルガは、西から移動してきたアーリア人種が使用していたラテン語アクアに基づいていたということである。やはり、水(の持つ性質)は世界の共通語ということなのであろう。

余談ながら、「赤ん坊」、「赤ちゃん」の「赤」も、この関伽に依るという話もあるが、これは確かな裏付けが無い。しかしながら、親から子へ、脈々と受け継がれる生命の尊さを霊性ある水に由来を求めても不思議ではない。西洋でも英語 babble(バブル)は、「赤ちゃんが片言を言う」という意味と、もう一つ「(小川が)サラサラ音を立てる」という意味があるくらいです。



水の神の誕生

『古事記』によれば、伊耶那岐・伊耶那美の男女2神は、国生みとともに多くの神を生んでいる。下図はその一部分だけであるが、ここで両神は有名な3神（天照・月読・須佐男）とは別に火の神（火之迦具土）を生み、伊耶那美はこの際に熱でもって亡くなってしまいます。嘆きと怒りから伊耶那岐は、我が子ながら火之迦具土を剣で斬り殺してしまいますが、剣からしたたり落ちる血の中から生まれたのが、水の神（闇淤加美）です。大きな争い事があったのか、あるいは「火は水をもって制す」という喩えかと思いますが、現在、闇淤加美は貴船神社の祭神として祀られています。そのため貴船神社は水を司る霊場として、昔から降雨・止雨の祈願をする所となり、今日も例年3月9日には「雨乞祭」が執り行われております。



貴船神社の民間信仰としては夫婦・男女の仲を守る神として、またその反対に縁切り祈願の神として有名です。その顕著な例は、和泉式部と宇治の橋姫の物語（夫の心変りが題材）でしょう。前者は願いが叶い夫と復縁したようですが、後者は生きながら鬼神と化し、ねたましい男女をとり殺すという「牛の刻参り」説話となります。「通い馴れたる道の末、夜も^{ただす}糺^{みぞろがいけ}の変わらぬは、思ひに沈む御菩薩池、生けるかひなき憂き身の、消えん程とや草深き、市原野への露分けて、月遅き夜の鞍馬川、橋をすぐれば程もなく、貴船の宮に着きにけり」とは謡曲『鉄輪（かなわ）』の狂おしい場面です。

格式

大和朝廷が国家運営のために定めた法体系のことで、律令制度の根本です。「式」は行政法・刑法・民法などの内容を指し、「格」はそれを補完する政令・条例のようなものです。典礼儀式において、どの位の人がどのような役目を負うのか、序列とか権利義務が厳格に定められています。そこでは神社の序列も上から順に大社、中社、小社と明確に定められています。格式は『弘仁格式』（弘仁 11・820年・嵯峨天皇）を最初とし、『貞観格式』を経て『延喜式』の撰上（延長 5・927年・醍醐天皇）をもって集大成されました。格式は昭和 20年（1945）、終戦の年をもって中止されますが、延喜式に名前が載る（式内社と呼びます）ことは、神社が“老舗・重鎮”であることを示しています。貴船神社は、明治 4年の太政官通達によって上賀茂神社から独立した形となり中社となりますが、延喜式内社であり 4度も大社に列せられた由緒ある社格の神社です。

志明院 (正式名：岩屋山金光峰寺、俗称：岩屋不動)

当寺の境内は背後の岩屋山をとり入れてすこぶる広い。全山鬱蒼とした老杉巨椈の生い茂る中に巨岩怪石が群がりそそり立ち、その間を溪流がほとぼしり、とても変化に富んだ景観をなしている。

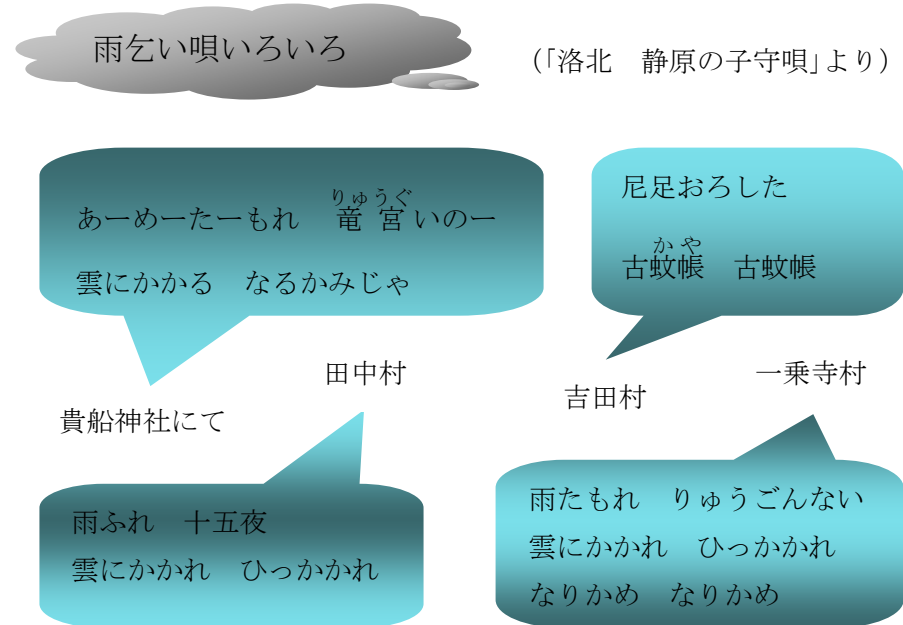
不動明王を本尊とする真言密教系の寺院である。いわゆる修験道の霊場でもあるが、大和の大峰山とは異なり、はじめから女人の禁制を解いていたようである。そのことと無関係かどうか、この山を舞台とする歌舞伎十八番の一つ『鳴神(なるかみ)』の主役は、宮中随一の美姫、**雲の絶間姫**である。

岩屋山に籠り修行中の**鳴神上人**は、息子が生まれるように祈願してほしいと朝廷に頼まれ、首尾よく事を果した。約束通り戒壇を建ててもらえると思っていたのに、朝廷がこの件を反故にしたので、怒った上人は雨を呼ぶ竜神を岩窟に閉じ込めた。都では厳しい旱魃に襲われ、困った朝廷は、上人の怒りを静めるため絶間姫を遣わしたのである。

姫は上人を女の色香で惑わし、美酒に酔わせて眠らせた。その際に竜神を封じ込めた注連縄を切ったところ、踊り出た竜神は天に上り、沛然として雨が降ってきた、という次第である。

この物語は、岩屋山が鴨川の水源を守る神の棲む所とされていることを示している。史実でも、平安朝の宇多天皇は志明院を勅願所に行っている。朝廷をはじめ古代の人たちは、旱魃の時には降雨を、降雨が激しい時には止雨を、水の神に祈願していたのである。

境内には、弘法大師が護摩の行法をしたという護摩洞窟や神の降誕地として神聖視される神降窟がある。司馬遼太郎氏も京都の新聞記者時代に修験道の取材でよく訪れており、著書にもわずかながら触れてある。



上記の雨乞い唄は、**北尾正夫氏**という静原小学校の校長が昭和期に地域の伝承を採集されたものである。実際には滑稽な動作とか踊りが伴う。素朴な言葉の中にも、真剣に雨を乞い願う気持ちが溢れているようで、かつての農耕民にとっては当たり前の姿なのであろう。

私たちの生活は、災害でもない限り「命の水」と感じることは無いに等しく、ましてや、霊性が潜むなどとは誰も顧みなくなったようだ。

京都市内に降る1日平均の雨量は、琵琶湖疏水から毎日供給される水量よりも多いらしい。実は、千年も前に降った雨水が今頃になって地表から染み出し、川となって流れているわけであるが、私たちにはただ現在を流れる川水としてのみ映っているようである。